

第1回北九州市学校規模適正化の進め方検討会議議事録（要旨）

- 1 日時 令和5年7月31日（月）10時00分～11時40分
- 2 場所 小倉北区役所東棟6階 教育委員会会議室
- 3 出席した者（構成員）の氏名
倉光 晃子、齊藤 由里恵、南 博、山本 健太郎、錦戸 千晶、松井 清記
三浦 隆史、古閑 明子、吉田 一憲
- 4 傍聴人 2名
- 5 会議経過（発言内容）

【教育長挨拶】

教育委員会は、小・中学校、いわゆる義務教育段階の学校での教育は、学習の面で、教科などの知識や技能を習得してもらうだけではなく、子どもたちが集団の中で切磋琢磨することを通して、思考力や判断力、問題解決能力などを身につけて、心身の成長を促す場でもあると考えている。

この教育効果を高めるためには、例えば話し合いや、子どもたちの学習の場での共同的な活動、多様な考え方に触れることができるように、ある程度の集団規模を確保する必要があると考えている。このような考え方のもと、教育委員会では、平成29年3月に「北九州市立小・中学校の学校規模適正化の進め方」を策定して、児童・生徒の将来推計も踏まえて、取組を進めてきた。

具体的には、今年の4月に小森江西小学校・小森江東小学校の2つの小学校を統合して、小森江小学校を開校した。その1年前には、若松区の修多羅小学校・古前小学校の2つを統合して、くきのうみ小学校を開校した。ある程度の集団規模が確保でき、子どもたちの教育環境が整ったと考えている。

学校規模適正化の取組は、子どもたちの将来推計をもとに実施しており、この将来推計の基礎資料となる国立社会保障・人口問題研究所の地域別将来推計人口が今年中を目途に更新される予定である。その将来推計人口の更新のタイミングを見据えて、今後の進め方を検討していきたいと考えている。

この検討にあたり、教育委員会だけでなく、さまざまな知見を持った皆様から、幅広いご意見をいただき、それを反映させていく必要があると考えている。それぞれのお立場から、忌憚のないご意見をいただきたい。

【座長選出】

南構成員を座長として選任

【議事】

- (1) 学校規模適正化の考え方
- (2) 本市の現状
- (3) 現在の進め方のポイント

事務局より議事資料に基づき一括説明

(座長)

ただいまの説明に対し、ご質問やご意見等あればお願いしたい。

(A構成員)

教育についてよりよいものをとという形で、小規模校、大規模校のメリットデメリット等があった。子どもたちのよりよい教育環境のために一番尽力していただきたいという部分がありながら、やはり財政の問題というのは非常に根本にあると思う。

教員不足や、日本全体の教育にかかる予算も先進国の中では最下位というぐらいに桁違いに予算がない。北九州市も非常に財政が苦しい中で、学校を縮小し教員を減らし土地を売却しという部分も、たぶんこの根本にはあると思う。

コロナ禍で、大規模・小規模校のメリットデメリットや学習指導要領が変わった中、個別最適な教育を求め、大規模校は効率よく、逆に小規模校は自己肯定感を上げるように、個別それぞれ詳しく先生がついて見落とすことのないような教育ができるのか。そこにまたICTが入ってくれば、教員ではなくタブレットに頼るということが今後できると思うが、現状北九州市においても、日本全国においても、ICTの活用には学校や地域、教員ですごく差がある。そのような点から、学校の統合を進める順序を果たして「教育委員会が決めて、それから住民に説明して」という部分が本当にいいのかと思う。

児童のアンケートも8割が「賛成」とあるが、2割の人が「反対」であったら、そちらの意見もやはり取り入れなければならないとも思うし、短期的に動くのは、ちょっと場当たりのではないかという印象を受けた。

これは予算的な部分もあるが、市全体のいわば都市開発も含めてデザインだと思う。通学支援があるから安心、だけではなく、通学支援はあるが今不登校が増える中で、ではスクールバスに乗り遅れたらどうなるのかなど、そういうところの議論も今後時間をかけてやっていかないといけないと思う。

それと、学校というのは、統廃合、校区の見直しなどで変わるところがあるし、マンション開発で校区の人口推移が大きく変わるなど、そういったところも考慮しながら、集まった識者の方と、学校・子どもの教育といった部分と、地域、学校の歴史といったところを、もっと時間をかけていかないといけない。小森江小学校の件も地域にわだかまりができ、保護者同士もぎくしゃくしたところがいまだにあるという意見を聞く。

今の進め方には経済的などところがあるのではという部分が一番心配だが、こうしたあたりを大事に取り扱っていくような会議になるといいと思う。

(座長)

大変重要なポイントをいくつもお指摘いただいたと思うが、今の話を踏まえ、事務局として話せることはあるか。

(事務局)

学校規模適正化の進め方の説明で小規模校・大規模校のよさなどを紹介したが、小規模校で起こることの難しさとか、大規模校になりすぎることの難しさなどは、またひとつあると思っているので、そういうところができるだけないように、あくまでも子どもたちがよい教育環境の中でしっかりと学んで切磋琢磨して成長していけるように、との観点で取り組んでいるところである。このような観点で進める中で、結果として学校統合があり、跡地の活用等その後に出てくるところではあるが、教育環境の整備、子どもたちの教育環境を整えるというところで取り組んでいるので、そこはご理解いただきたい。

(A構成員)

根本的には予算や財政の問題があることは確かなのか。

(事務局)

学校規模適正化を進めるにあたっては、財政という観点で進めているものではなく、子どもたちの教育環境の整備ということを目指して取り組んでいる。

(A構成員)

はい、ありがとうございます。

(事務局)

先ほど、行財政改革とか財政の話が出たが、国全体で見ると、子どもの数はピークの時より、これは北九州だけではなくて、一部の大都会は別として、国全体で子どもの数はピークの時に比べて減っているのと、本当に今、今年もいわゆる出生数が過去最低を更新しているが、学校の教員の数そのものは、減ってない。子どもたちを取り巻く教育環境というのが、昔のように50人とか40人の1クラスに、1人の担任の先生が一斉に授業をするというのではなくて、さまざまなサポートをしないといけないということで、教員の数は結果的に減っていない。さらに言うと、今は本当に教員不足と言われていたが、ICTの活用や、個別最適なニーズに応える、あるいは不登校に応えるというようなことで、先生方に対してのニーズというのは非常に大きくなってきており、そういう意味では、子どもの数が減ったから、学校を減らして教員も減らすというのは別の話として考えていただければと思う。

議論が混同しやすいのだが、小規模校と少人数学級というのはまた別で、小規模校になるとクラス替えができない。1学年で10人台などになると、男女の人数バランスが例えば10人と1人など、学年毎にばらばらで、クラス替えができない中で6年間過ごすといった問題が出てくるので、できれば本来は適正規模校で、なおかつ1つのクラスが35人とかではなくても

う少し少ない人数というのが理想ではないかと考えている。いわゆる小規模校と少人数学級というのは少し別だということをご説明させていただきたい。

(座長)

スケジュール感について事務局に確認だが、基本的にはまず今年度内での検討を目安として進めていくということでもいいか。

(事務局)

今後に向けた考え方やポイントの中で、どういうやり方があるだろうというところを幅広く、1年間でしっかりご意見を伺っていきたい。

(B構成員)

放課後児童クラブについて、学校が統廃合になるということになれば、学童の方も統廃合ということになる。職員間のことや、どういった形で学童を受け入れていくのかといった細かいことを、子どもたちも不安だと思うので、きめ細やかに、子どもたちの対応ができるようなことも話の中に入れていただきたい。子どもの支援に関しては、学校が変わっても、子どもが増えても対応できるような形にしないといけないと思っているのでよろしくお願ひしたい。

(座長)

今の点、事務局からコメントあればよろしくお願ひしたい。

(事務局)

学童がどうなるかというのは統合の時には必ず話題になるので、そのあたりもしっかりとご意見を伺って盛り込んで参りたい。

(C構成員)

自治総連合会は地域とのまちづくりをやっている。地域には、市民センターが各小学校区にだいたい1館あり、そこを中心にして、まちづくり協議会も動いている。そのため、地域の方や保護者との十分な話し合いをしていただきたいと思う。先ほど出た学童は、多くをまちづくり協議会が運営している。そういうことも踏まえ、その校区のまちづくり協議会、地域の方との十分な打ち合わせをしていただくようによろしくお願ひしたい。

また、統廃合になると市民センターが小学校区に2館になるなどいろいろなことがある。できれば区役所のコミュニティ支援課も入れて、地域の方が納得しないとだめだと思うので、ぜひ地域関係、保護者、十分に説明会、打合せをしていただきたいと思うのでよろしくお願ひしたい。

(座長)

ただ今の件について、事務局から話があればお願ひしたい。

(事務局)

現在でも地域の方たちのご了解をしっかりといただいたうえで進めていかないといけないということで進めているが、今回の検討会で、地域の方たちからどんな風に声を聴くのがいいか、どんな風にしっかりと説明をしていくのか、逆に地域の方たちからの声はどうやったらあがってくるのかなど、そういったところについてもご意見をいただき、盛り込んで参りたい。

(C構成員)

各小学校区に連合会があるので、対象の小学校の連合会に相談し、どういふ人呼んで説明をすべきかなどは把握できると思う。

(事務局)

その辺もしっかりご相談しながら、進めて参りたい。

(事務局)

これまでも進めていく中では、どういふ方に話を聴いたらよいかなど、相談させていただいてはいるが、さらに教育環境の整備をスムーズに進めていくにはどういふ方にどういふ風にアプローチしたらよいかなどを、ご相談させていただくことになると思う。

(C構成員)

まずは地域振興課の方に相談して、自治総連合会のどこに相談するかなどの検討をしっかりとやっていただきたい。地域の納得がないと厳しいと思う。

(事務局)

子どもたちの教育環境をなるべく早く整えていくということを考え、どういふ形で地元の意見を聞いたりアプローチするのがよいか、ご相談させていただくことになると思う。

(C構成員)

しっかりとやっていただければと思う。

(座長)

これまでの意見について、市役所の他部局や各区役所との関連性があると考えているが、そうした他部局との調整について、事務局の方から教えていただきたい。

(事務局)

例えば学童の話は子ども家庭局、跡地の話は財政部門、地域の関係であれば市民文化スポーツ局など、テーマに応じてその都度関係部局としっかりと連携しながら取り組むという形で進めている。

(座長)

検討会で出た意見については、内容に応じて事務局の方から各担当部局に伝達ないし調整を図っていただけるという認識でよいか。

(事務局)

はい。

(D構成員)

スライドの17ページにある、適正化対象校の中で検討対象外にあがっている②の小規模特別転入学制度認定校について、ご希望される子どもはどれくらいいるのか、またニーズはどういった形があるのか、教えていただきたい。

(事務局)

現在本市ではのびのびフレンドリースクールとして、小倉南区の合馬小学校と、門司区の柄杓田小学校、八幡東区の河内小学校、この3校で実施している。合馬小学校で制度を利用して通学している児童が現在35人、柄杓田で12人、河内で14人である。多くはないが新規の希望もあり、1年毎に更新であるが、継続される子どももいる。

この制度の趣旨としては、自然環境に恵まれた郊外の学校へ市街地に住んでいる子どもたちが通うことで、お互いが交流して、のびのびと学んでいただくということによって、自然の中で、ある程度小規模な環境になるが、学びたい、通いたいという子どもが毎年応募してきているといった状況である。

(D構成員)

もう一点は、特別支援教育の視点から考えると、現在実に多様な教育的ニーズを持ち合わせている子どもが多くおり、そういった子どもは、もし適正化の検討の対象になって、転校という形になると、大きな環境の変化で学習効果に大きな影響を及ぼすものだと考えている。

そういった子どもたちの学びの場所、学びの機会の保証はとても大事だと思っている中で、まだ特別支援の教育の体制というのはさまざまで、障害種にわけて特別支援学級があるが、全ての学校が全ての障害種の学級を設置しているわけではなく、場合によっては自分の校区から他校の学級に通わなければならない子どもも出てきている状況にあるように思う。こういった転校や、学校規模が変わり、人が多くなることで、場合によっては負担になる子どももいるし、落ち着いて学べる場というのを踏まえてご検討いただきたいと思っているが、その辺りはいかがか。

(事務局)

我々も、適正化を進めるにあたって、特別支援学級についてもしっかりと考慮したうえで、進めていかないといけないと思っているので、そういった視点でご意見をいただきたい。

(D 構成員)

それともう一点、インクルーシブ教育を広めていかなければならないとなったとき、大規模学校のデメリットの教員間の連携が難しくなるというのも懸念事項だと思う。もちろん適正な規模というのは必要だが、教育体制として、いろいろな子どもが交流し、共生社会を実現していけるのかと懸念しているところもあるので、そういうところもうまくいくとよいと考えている。これは意見として挙げさせていただく。

(座長)

先ほど、学識経験者に関しても、それぞれの知見を活かしながらという話があったが、私を含め4人の学識経験者が、どのような観点から、この会議に参加させていただいているかということについて、先ほど特別支援教育の専門的見地からの発言もあったが、その他の方々について、ご専門あるいは今の時点でどのような考えをお持ちかというのをお話いただきたいと思っているがよいか。

(E 構成員)

私は専門を地方財政や公共経済学、また近年はこういった公共施設の老朽化への対応などもやっている。その観点から、今回説明いただいた内容、教育の効果というところは理解をしている。そのうえで、やはり学校そのものはいろいろな歴史的経緯があると思うし、地域の核としてこうなっていったということもあると思う。そこで言うと、地域にとって、学校の役割とは何なのかというのが今回の説明にはなかったのではないかなと思う。地域にとって、学校はどういう役割をもっているのかについて、考えてもよいと思っていて、その中で、学校があること、つまり児童や生徒がいるということと、学校の施設があることはおそらく違うということで、学校の役割や、施設があることの効果みたいな部分を考えていく必要があると思う。

施設でいうとやはり老朽化しているというところがあるので、特に学校は安全に学校生活を送ることが基本中の基本だと思うので、老朽化している施設はどういう風に対処していくのかということも、適正化を進めるうえでは1つのポイントかなと思う。

よく統合をすると、「地域から学校がなくなる」というような言い方をされる方もいて、地域から学校がなくなってしまうと、そこで子どもを産み育てることがし難くなるのではないかなということ指摘されることがあると思うが、もしそこで、今後人口が増えてきたら、それに対して対応できるという未来、そういったメッセージも今回含めておくことも必要かなと思う。

児童生徒が減っていく中で、学校という施設だけが残っていったから小規模校が残っていったというところで、時代の変化に対応していなかったところもあり、対応しづらかった面もある中、北九州市は白書をつくったりすることで対応していくという風に決めていったと思う。

また最近では、これまでの話にもあるようにICT教育もあるし、インクルーシブ教育などいろいろな面で学校の役割が多様化していることを考えると、小規模校では対応し難くなっているというところでもあり、変わ

りゆく環境の中にも対応しやすいソフトとハードがあるかと思うので、そのようなところは適正化の中でポイントをあてるのもよいと思う。

また、最近では、例えば小規模校、あるいは適正規模校でもクラス数が少なくなっていたり、児童生徒数が少なくなっていくと選べる部活動が少なく、例えば野球かサッカーどちらか1つしか開設できないとなったときに、小規模校がゆえに自由度が失われているというところもあると感じているので、多様化への対応という観点も、適正化を進めていくうえで重要だと感じている。

(座長)

私の専門は、進め方のポイントで言うところの人口動向などを見据えながら施設の最適な配置を考えるというところに問題意識がある。

その後、大学でいろいろな仕事をしていくうえで、地域における施設のあり方というのが、非常に大切だということを再認識して、近年はそういった地域における施設のあり方や、あるいは進め方のポイントでいうと、跡地の活用といったことも含めて、地域のコミュニティにおいて施設がどうあるべきかといったことなどが主な関心領域である。

特に個別の内容としては、スポーツや文化芸術を活かしたまちづくりということにも非常に興味を持っている中で、学校の部活動のあり方、今は地域移行の話もあるが、そういったことなどにも興味をもっている。

小学校や中学校というのは、児童生徒の心の中に一生残る、いろいろな経験や思いというのが蓄積されていく場所だと認識している。北九州全体の人口問題などを考えていくうえでも、例えば将来的な人口定住や、シックプライドの醸成なども視野に入れながら意見を述べさせていただきたい。

(F 構成員)

私は土木工学で、地盤工学や環境工学、昔は都市計画などもやっていた。防災拠点などの認識もあり、地震時などは小学校が避難所になるということもある。

小学校は過去の人が検討して、割といい立地のところにあると私は考えている。市の将来ビジョン、都市計画などが重要になってくると思う。小学校があると、そこに人が集まり地域の核、拠点になったりするし、小学校があるから転入してくるなどもあり、難しい点だとは思う。

私は防災的な観点から、明らかに老朽化が進んでいるならいい立地のところに移すべきだと思うが、今もそれなりにいい立地のところに小学校ができています。ただ都市計画も変わってきていて、人口が衰退しているところもあるし、小学校の教育、先生も大変だと思うし、皆さんでいろいろな議論をして、地域などのすべての人が納得するのは難しいが、それなりに納得していく形で前もって市の将来的なビジョンとも組み合わせていければいいと考える。

(座長)

学校代表としてお越しいただいている構成員の方のお考えをお願いしたい。

(G構成員)

私の勤めている小規模校の具体的な現状をお話ししたい。まず、きめ細やかな指導が行いやすいという点で、各教科1人の先生になるので、兼務の教科もあるが、全校生徒を全職員が知っており、そのため情報共有を密に行いやすいことが子どもたちのきめ細やかな指導につながっており、大きなメリットだと思う。

また、例えば体育大会について、通常であれば、縦割りと同学年のクラスマッチ形式という構成になるが、同学年で競技が組めないため、すべて縦割りとなる。1クラスを本校では3チームに分け、縦割りでチーム構成をしており、全校生徒の交流や、先輩・後輩・中堅それぞれの役割を果たして、それが伝統となっていくといういい教育的効果はある。その反面、同学年同士の切磋琢磨する機会、学級内での意見交換等が学校行事では大きな効果を生む面もあるので、そういう機会がないというのはデメリットかと思う。そのことは同様に、多様な考え方に触れる機会や学びあいの機会という面において、日頃の授業の中でも感じる。

中学生というのは、特に学年ごとの発達段階が小学生に比べると加速が大きいという面もあるので、同学年同士の切磋琢磨する機会が多い方がいいと思う。また、クラス替えがないことから交友関係が限られ、トラブル等でこじれてしまった場合、なかなか修復が困難であるというようなデメリットはある。校区内の小学校も小規模校であり、そういうところは感じている。

それともう1点、資料にもあった、指導方法の工夫改善や校内研究体制の充実を図るという点で、各教科の先生が1人というのは、外の研修に行くような機会や、ハイブリッドの研修なども活用し、積極的に研修を行うように工夫はしているものの、同じ学校に同教科の先生と一緒に学びあう機会があるとよりよいと感じる。

(事務局)

もしよかったら部活動のこともお願いしたい。

(G構成員)

部活動については、ご指摘のとおり、子どもたちのニーズに応じた多様な部活動の選択ができる機会があるといいと考えているが、職員数等の関係で、部活動数が限られるというのが現状である。

その解消のために、合同部活動というのは以前からあり、併せて、昨年度から本市では連携部活動という形で近隣の学校の部活動に参加できるような体制を整えているので、本校でも活用している。ただ、近隣とはいえ移動時間や移動手段などの課題はあると思っている。

(H構成員)

私は小規模校の経験はないが、小規模校も適正規模校でも大規模校でも、子どもたちは自分の学校が大好きで、楽しく学校に通っているのは事実だと思う。ただ、例えば知識や技能を単に教えるだけの授業であるならば、小規模校では習得は他の学校に比べてやりやすいと思うが、そうではない今の教育のあり方からすると、限られた人数の中で、例えば1学年が10

名前後や10名を切るような状態だと、もうアットホーム、家族のようなもので、そこでこれから子どもたちが大人になるにあたって、多様な価値を受け止めながら、さまざまな人と折り合いをつけながら、生きていくことができるのかというのは、やはり肌感覚として感じる。

また、大規模校の課題として挙がっているが、例えば生徒一人一人に目が届きにくく、きめ細かい指導ができていないわけではないと思う。大規模校でも適正規模校でも、小規模校でも同じだと思う。子どもたちがこれから大人になるにあたって、多様な価値感であったり、学びの場が選択できたりと考えたときに、もちろん学校というのは、保護者や地域の方、学童の方、いろいろな方々に支えられながら成り立っているのは事実であるが、そこにいる子どもたちにとって、大人になるにあたって今どうすればよいかということ、子どもたちを真ん中にして、あり方を考えていっていただきたいというのが私の率直な考えである。

(座長)

その他、全体的に、どのようなことでも結構なので、ご発言等があれば、お願いしたい。

(A構成員)

お願いであるが、「適正化＝合理化」にならないようにしてほしいという思いがある。予算の都合という部分や人数だけでなく、どういう教育をするのが子どもたちに一番適正なのかというのを芯にして考えていただきたい。先ほど「未来」というキーワードが出たが、地域の方も、学校が心臓となり、子どもたちが血液のような形でまちが回っているというのがあって、学校のために、地域の人も日々安心安全のために力を注いでいる部分がある。統廃合や適正化されたときに、地域の人も未来を感じられるような適正化、例えば施設の老朽化の話があったが、コンクリートの建物は60年が寿命で、30年で大規模改修が必要という話もあるが、今、中学校は70年過ぎても、未改修の学校はたくさんある。そういうところも改修が必要だろうが、そうであれば、そこに小中一貫校として統合するなど、あったものがただ無くなっていくのではなく、未来に向けた取組、未来を感じるような希望を持たせることを地域に与えてくれると、地域の納得も得やすいのかなという部分と、北九州市は残念ながら、公立幼稚園がなくなっていく方向だが、保幼小一貫校とか今までにない教育、北九州市はチャレンジしているというところを全国にアピールしてほしい。以前からずっと北九州市は「子育て日本一」だということを謳っているのだから、それに見合ったソフト面・ハード面になるような適正化をやっていただきたい。

(E構成員)

児童生徒のことを考えての適正化というところで、適正化した後の学校生活では、教育効果などについて今まで以上のものを求められると思う。そこを目指してやっていくというところであるが、そこに行くステップのためには、統合の対象となった学校の児童生徒が不安なく学校生活を送っていくというところも重要で、統合したときに問題が起こらないように、起こっても対応できるように、事前に取り組んでいくことも大切である。

その先のステップで目指すこと、目的とは少し違ってくると思う。児童生徒のことを考えて進める必要があるが、それだけでは進まない部分もあるので、分けて考える必要もあると思う。

統合後のアンケートは先ほど見せていただいたが、例えば不安に思うことなど、事前に児童生徒にアンケートやヒアリングなどをしたことはあるのか。

(事務局)

事前というのではない。

(E構成員)

そうであれば、対象となる子どもたちが、適正化や統合ということを知ったときに、何がネックになって、何が不安になっているのか、もちろん楽しみもたくさんあるだろうが、特に不安に思うようなところは少しでも解消できるようなプロセスが入っていくといいと思う。

出せるかは分からないが、少し気になる点としては、今回アンケートを実施して、「統合して良かった」と思う人が多かったというところで、松ヶ江北小の場合、伊川小が松ヶ江北小と比べて人数が少なく、中井小の場合は、北小倉小学校が少ないが、例えば人数が少なかったところと多かったところでアンケートに違いはあるのか。

例えば、人数が多いと、他から入ってきて新しい友達ができて「良かった」となり、特に自分たちの人間関係とか友人関係が大きく変わるわけではなく少し増えたというところで「良かった」となりやすいのではないかと思う。人数が多いことで割合的に高くなりやすいのか、あまりそこは関係なく、やはり「統合して良かった」という結果になるのか。例えばもし、人数が少ないところが、「そうは思わない」が多かったからといって、「統合が良くなかった」ということではないと思うが、では、そうは思わなかった理由として、どんなことが考えられて、適正化にあたってのプロセスには、そういったことがないように何か入れ込めないかということも少し思った。ただ人数が少ないがゆえに個人が特定されやすいというところもあろうかと思うので、事務局で確認して、可能な範囲で次回教えていただきたい。

(座長)

アンケートについて現時点で回答できる部分があればお願いしたい。

(事務局)

次回お示しできる形でお示ししたいと思う。

(事務局)

こども家庭庁の新設とともに、こども基本法が成立し、いろいろな施策の決定に子どもが関わっていくことが求められており、どのような形で子どもたちの声を吸い上げていくかという点で、よりきめ細やかなものが求められるということになっていくと思う。いただいたご意見も参考に、今回の会議は、今までの規模適正化から、一歩進んで、これからの規模適正

化とはどうあるべきかという方向性を見極めて、そのような世の中の大きな流れも踏まえて、子どもたちの意見をどう汲み取っていくかということも必要だと思う。

(座長)

それでは、本日の意見を踏まえて、取組を進めていただければと思うが、事務局からは何かコメント等はあるか。

(事務局)

かなり広範囲にご意見をいただいた。適宜検討していきたいが、限られた時間であるので、どのあたりを重点的に議論していくかを、次回の検討会に向けて座長と論点整理していけたらありがたいと思う。どういった形で進めていくかを考えたい。

(座長)

もちろん基本となるスケジュールはお示しいただいているものかと思うが、多岐にわたるので、あまり拙速すぎる議論はよくないのではないかと思う。スケジュールについても少し柔軟性を持たせながら進め、議論を進めていく中で、こういった検討も必要とか、そのようなことも当然出てこようかと思うので、追加したり、場合によっては少し簡略化するような形で進めていければいいと思う。構成員の皆様におかれても、柔軟にフレキシブルな形で動かしていくことになるかもしれないので、その点ご了承ください。